

出演者の紹介

韓静さん
黒龍江省羅北県出身尼崎市中国残留邦人支援相談員
母は残留孤児、松倉秀子さん身元は不明。敗戦直後のハルビンで、病に侵された日本人女性（松倉秀子さんの実母は2歳だった秀子さんを中国夫妻（養父母）に預けた

下岡純子さん
吉林省琿春市出身 八尾市で訪問介護の事業所を設立運営父は残留孤児、下岡俊夫さん父は家族とともに和歌山県から送出された琿春津軽開拓団に加わり、当時の間島省琿春県（朝鮮とソ連と中国、3国の国境の地）に入植した。敗戦の避難生活の混乱の中で両親は亡くなり、姉と兄と俊夫さんが生き延び、その後も中国に残された。
貫名歩子さん
山東省德州地区武城県出身大阪帰国者センターの中国残留邦人支援相談員
父は残留孤児、貫名利雄さん父は家族とともに大阪から送出された昇平開拓団に加わり当時の浜江省安達県に入植し

た。敗戦後、安達県の避難所で中国人養父母に預けられたその後、養父母の出身地の山東省に移住した。
林花子さん
黒龍江省嫩江県出身西宮市中国残留邦人支援相談員。
祖母は残留孤児、林つたさん祖母は宮城県で編成された満蒙開拓青少年義勇隊の夫と結婚し、当時の北安省嫩江県柏根里開拓団に入団した。夫は敗戦開拓団に徴兵され、そのままシベリアに抑留された。敗戦後つたさんは生まれた子供と避難生活をしたが、子供は餓死し、その後生き延びるために中国人と結婚した。
柳瀬艶子さん
黒龍江省林口県出身宝塚市中国残留邦人支援相談員
母は残留孤児、柳瀬啓子さん身元不明。母は当時の東安省林口県麻山駅付近で中国人に保護され育てられた。

田中いずみさん
コスモスの会尼崎日本語教室スタッフ

中国残留日本人への理解を深める集いを開催

2020年11月28日(土)
尼崎市立中央北生涯学習プラザで、第6回「中国残留日本人への理解を深める集い」を開催した。

コロナ感染状況を見ながら直前まで開催の判断に悩まされたが、感染予防対策を工夫して無事開催できた。当日、最後まで参加された稲村和美市長は、「中国残留日本人の歴史への記憶が薄れていく中で、次の世代につなぐ意義が増している。当事者の話を聞く大変重要な機会である。今後この集いを続けることを期待したい」と挨拶された。
第1部手記の朗読
50歳で日本に帰国後、残留孤児への支援や謝罪を求めた国家賠償訴訟の原告に加わった宮島満子さんが綴った手記「8人

対談

① 親が中国残留日本人であることを知ったのはいつか？

韓：母が日本に肉親捜しに行っていたのは私が中学生の時だった。
下岡：小学生の時、同級生の子に「小日本鬼子」と言われたが、その時には父が日本人とは知らなかった。でも父の発音は普通の中国人とは違うし、朝鮮人とも違うと不思議に思ってた。母に聞いたら「父は日本人ですと教えられた」「なんで父は日本人なのかわからなかったが、聞かなかった。小学校で弟妹、伯母さん父の姉）の子どもと同じようにいじめられ、その頃「父は小さい時に日本から中国に



柳瀬艶子さんの母（啓子さん）が中国人に保護された麻山駅付近

来た」と知った

貫名：1992年、先に日本に帰っていた父の弟が私の中国の家を訪れた。その時父が日本人だとわかり、自分が2世だと知った。

林：私は弟とは1歳違いで、そのため8歳まで祖母の家で生活していたので、子供のころから自分の祖母が日本人だと知っていた。

柳瀬：小学校5年生の時に県の警察が調査に来た。その時、母が日本人だと知っていた。

② 帰国することをどう思ったか

韓：母は中学の数学の先生だった。母は肉親捜しに参加して日本に行き、日本の教育の良さを知り私たちにその教育を受けさせたいと思ったのだから。私たちに相談せず、両親で帰国を決めた。当時中国は改革開放が始まって外国留学がブームになり私たちが日本に行くことを周りに羨ましがられて、私たちが浮か



教師時代の松倉秀子さん（韓静さんの母）中央

れ、うれしい気持ちになっていた。他方、学校の友達や親戚から離れる不安もあり複雑だった。

下岡：父は75年に伯母さん（父の姉）と日本に短期帰国した。父は4カ月、伯母は6カ月、その日本滞在の話聞いて、ああ一度父の生きたところに行ってみようかと思った。その後私も成長し、結婚後の93年、日本の戸籍を持って残留邦人の子供や孫を対象に仕事の募集があった。父が日本の戸籍簿を持っていておかげで、私と妹は94年9月に岐阜県の縫製工場でする約束で日本にきた。



東部国境虎林線沿線に入植した開拓団

の家族を満州で失って」を朗読グループ「ま・どんな」の小森秀美さん、岸本恵美子さん、宗景眞利子さんが朗読した。宮島さんは3歳で家族と共に開拓団として満州の東部ソ連国境に入植し、9歳で敗戦となり、開拓村からの逃避行と難民生活の中で孤児となり、中国人夫婦のもとで育ち、た稲村和美市長は、「中国残留日本人の歴史への記憶が薄れていく中で、次の世代につなぐ意義が増している。当事者の話を聞く大変重要な機会である。今後この集いを続けることを期待したい」と挨拶された。
第2部対談
当会スタッフ田中いずみさんの司会進行で、2世・3世の5人が「親たちの人生を語る」と題して対談した。歴史に翻弄された親たちの人生をどのように感じているか、日本に来てからの自らの体験と共に言葉や国籍の問



安達さおりさんのピアノ演奏

名参加があり、アンケートでは「5人の皆さんが、トでは「5人の皆さんが、親・祖母の人生を受け止め、自分の使命を強く感じておられたのが心に残った」「国策で開拓民をソ連との盾にしたのは許せない。被害者は、いつも弱者だ」「これからこのようなチャンスがた開拓団で残留孤児となった宮島さんら5人の体験とその開拓団の経緯を紹介し、多くの市民に見ていただく機会となった。
\*宮島満子さんの手記「8人の家族を満州で失って」は、『高文研発行「私たち「何じん」ですか？」文・樋口岳大、写真・宗景正』に掲載されています。
（石打謹也）